

令和4年1月19日（水）
13時30分から15時
生涯学習センター・視聴覚室

1 開会

2 所長あいさつ

本日は御多用のところありがとうございます。今年度は当センターの運営もコロナウイルスに翻弄されました。前回7月の運営委員会の時にはデルタ株が感染拡大途中でお盆明けには一気に増加して1日50名という新規感染者数となりました。今度はオミクロン株が増加しているという状況です。

当センターでは多くの研修会をリモート形式で実施いたしました。研修等の配信あるいはオンライン開催に関するスキルは県の施設としてはトップクラスのレベルにあるものではないかと自負しております。職員一同さらに技術を磨いてまいりたいと思っております。

貸館につきましては利用人数を制限し措置をいたしました。当センターの利用団体による交流発表会が12月5日に開かれました。多くの利用団体がこの1年の成果を他の利用者の前で発表するという機会とすることができました。12月19日にはたくさんの企業から協賛をいただきながらボッチャの交流会を開催できテレビあるいは新聞等でも取り上げられました。

皆様から感想や意見をいただきます。来年度を考えるにあたっての検討材料とさせていただきますので今日はどうかよろしくお願いいたします。

3 出席者紹介及び資料確認（別紙参照）

4 委員長・副委員長あいさつ

5 案 件

（1）今年度の事業の実施状況

【総務班 職員A】

①センターの利用者数について

貸館は令和3年12月末現在で15,275人、令和2年12月末は12,079人で、3,196人利用が増えている。

団体数は令和3年12月が968件、令和2年12月末は769件で199件の増となった。大幅な伸びは見られなかった。

参考値として令和元年12月末の利用人数は3,2462人の利用。

スマートカレッジなど事業等の人数は令和3年12月末26,617人、令和2年12月末27,071人となっており454人の減となった。

②感染対策について

新型コロナウイルスの感染防止対策を5つ行なっている（※資料参照）。

利用定員を緩和したいが感染状況の推移を踏まえた上で検討していきたい

稼働率は昨年と比較すると6.3ポイント増加。研修がオンラインになっている関係も

あり、第一研修室を利用して配信する団体も多い。

安全でかつ安心して利用していただくことをモットーに、啓蒙等であったり、Wi-Fiの環境整備などを行う。

【学習事業班 職員B】

調査成果や研修講座この3つでねらいにせまろうとしている。その中でも現代的課題の障害者の学習、防災、持続可能な地域づくりこの3つが大きな柱としている。調査、研修、講座それぞれが独立したものではなく、関係をもたせて取り組んだ。

①調査研究

すべての県内の特別支援学校高等部生徒の保護者、高等部卒業生保護者対象のアンケート調査は684名のビッグデータになり、調査研究報告書をまとめた。この情報を分かりやすく伝えるため、リーフレットを今年度作成した。

当事者の意見を取り入れるため、熟議を行なった。コロナ禍で難しかったが、オンラインで実施した（※資料7P参照）。保護者のメッセージ、感激した。

2回目の熟議は車いすの方々を中心に対面で実施。このような機会を増やしていきたい。

②研修

○新任職員研修、市町村職員、公民館等職員研修

新任職員研修はYouTube配信で実施。コロナ禍でどのように情報を発信したらいいかを考えた。社会教育・生涯学習に関わる業務に新たに携わる職員に対し、心がけや取り組むべき業務の内容について研修を行った。

市町村職員研修ではLIVEアンケートを取り入れ、QRコードを読み取ってアンケートに参加できる仕組みを活用した。

公民館等職員研修では泊付き研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、車中泊等を行う形式に変更した。その際、日本赤十字秋田短期大学講師 及川真一氏と連携し、動画を作成し災害時に炊飯器がない時にご飯の炊き方等研修の動画を提供した。教材をYouTubeでいつでも見られるような状態にし、学んだことを試す形の研修を企画した。この研修は、昨年度の研修参加者から出たアイデアを具現化したもの。当センター職員、市町村職員にとっても、夏の災害時の大変さが分かった研修となった。

市町村と公民館の合同研修では、障害者と防災について及川先生に講師になっていただき、オンラインでグループワークを設けて話し合う活動を行った。対面には敵わないが、話し合いは可能だった。

○熟議ファシリテーター養成研修

地域と学校を結びつける一つの有効な手段としてコミュニティスクールという制度には、みんなで話し合う機会が必要だ。しかし、話し合いを進めるにはスキルが必要であるため、ファシリテーターの研修をオンラインで行った。熟議で使用したスライドも配付し、実際に他県からの参加者が活用した。こういった研修は市町村にとって必要なものになってくるので、今後も研修を企画していきたい。

○社会教育研究大会

岩手県教育委員会事務局 中部教育事務所 主任社会教育主事 秋澤美加子氏、青森県総合社会教育センター 育成研修課副課長 對馬 明氏、そして秋田県生涯学習センター 副主幹（兼）班長 柏木 睦、主査（兼）社会教育主事 皆川 雅仁が参加し、オンラインでパネルディスカッションを行った。

○家庭教育指導者研修

4回実施した。集まれる人は集まり、会場への集合やYouTube、ZOOMでの配信など、状況に応じて様々な形式で研修を行った。参加者への画面も工夫し、どんなメッセージを出せば比較的混乱なく始められるか、ノウハウが蓄積された。静岡県の掛川市からも参加していた。職員は進行役、オンラインのグループワークを作る役などを分担し実施した。

○オーダーメイド型社会教育主事派遣事業

6市町村から依頼を受け、地域学校協働活動やコミュニティスクールの運営など各市町村の実情に応じて熟議などを行った。自由に話し合いをする中でたくさん意見が出てきて、参画している意識を高められた。そういったことに繋げることが、ファシリテーター研修にもつながっている。

③あきたスマートカレッジ

障害のある方のための防災講座を4回実施した。1回目は焼きそばに水を入れる体験、第2回は家庭にあるものが実は災害の備えになるという講座、3回目はポリ袋でご飯を炊く体験を行った。3回目の講座では、ペットボトルに水を入れて穴を開けてフタを開け閉めすると水道みたいのできる簡易水道も体験した。4回目はアルミ飯ごうでご飯を炊いた。障害のあるなしにかかわらず災害に起きたときに経験したことが非常に役立つこと、経験が大事であることを学んだ。障害のある方も非常に楽しんで学んでくださった。

④企業との連携

第2回あきたWithボッチャ交流大会を12月下旬に実施した。県内企業21社の協力を得た。秋田ノーザンハピネッツから公式のボールをいただき、ブラウブリッツ秋田からもユニホーム等のグッズをいただいた。企業でも障害者に貢献したいと思っていることを、あきたWith代表のサイエンスコミュニティ社長がおっしゃってくださっている。この大会にとどまらず、障害者の生涯学習のために色々していきたい。

⑤障害者スポーツスペースの活用など

男鹿市立脇元第一小学校4年生のセカンドスクール活用、避難者交流センターのイベント障害者スポーツを体験を行っている。男鹿市でボッチャ体験の講師依頼もあった。秋田大学教育文化学部附属特別支援学校の防災授業も行った。

既成概念にとらわれず、今何できることを常に考えて精一杯やっていきたい。

【運営委員から】

(C委員)

児童会館には、昔遊びの研究会やレクリエーション協会などがある。道具があるから使ってください。

(D委員)

センターを借りた際のチェックシートがよかった。一緒に使っているメンバーにも、コロナ対策を伝える上で役に立った。最後に一緒に確認してもらったことで安心した。

熟議のプレゼンデータも県の財産となる。色々な活用ができるのではないかと。市町村、公民館研修がどんなふうに広がっているか、把握していたら教えていただきたい。

⇒（職員 B）

内部調査は行なっていないが、新聞、テレビから講師依頼を受けることがある。車いすを使った街歩きの研修は、参加者が実際に自分たちの市町村で講座を開いた例がある。防災講座で来ていただいている及川先生へ繋いでほしい、という問い合わせもある。

（E 委員）

コロナ禍で色々な方がセンターに来て事業に参加されていることがありがたい。町づくり、持続可能な地域づくりがキーワードになっていたが、私もその現場で一番今課題だなと思っているのが圧倒的なプレイヤー不足。ファシリテーターを担う人材について、熟議のファシリテーター研修でプレイヤーを増やし、サポーターというカテゴリーを増やしていると思う。圧倒的なプレイヤー不足などをどう改善できるか、ご意見いただけたら。

⇒（職員 B）

どこも同じ悩みを抱えているのではないかと。当センターでも熟議を確立させていくことは大変だった。今後は、どう使っていくのかの研修、熟議の実際の場面と、どう使っていくのかがセット。来年度以降もこうした研修を繰り返していく。

⇒（D 委員）

まずは見せる、興味をもってもらい、プラス研修がある。

⇒（職員 B）

今までの研修と少し違い、面白い、という意見も増えてきたことで、ファシリテーター研修を行なった。県外含め、60名くらい集まった。自信がついたので、今後も手助けしたい。体験と研修の繰り返ししかないのではないかと。

⇒（D 委員）

実体験と共に広げるのがポイントかと思った。

（F 委員）

生涯学習センターはリモート研修に関して非常に進んでいる。研修を受けるが一方的に見て終わりというものもある。YouTubeで会場の反応も分からないということもあるので、作る方の苦労もあるのでは。

⇒（職員 B）

所員も参加し、反応を得ながら撮影している。また、集中が持続する30分程度に区切り映像を作成することもある。コンパクトにまとめてコンテンツ化することも行なっている。

（G 委員長）

市町村からの反応はどうか。

⇒（職員 B）

新任職員研修では、今まで触れたことがなかった内容だったので参考になった。社会教育の根本に関わることで非常にありがたかったなどの意見を頂いた。集まることに主眼を置くのではなく、タイミングよく届けることが市町村の職員にとってすごく大事かと思う。YouTube配信により、繰り返し見るなど、参加人数よりも閲覧数が大幅に多かった。

(D委員)

ハイブリッド形式の研修がよかった。ここまで来るのも大変な時期、場所の関係などで一緒に受けられるのはいいと思った。オンラインでのグループにも割と話せた。

(2) 来年度の主な事業計画について

(H副委員長)

去年10月にオンライン熟議に参加した。意見を言うのをためらうような感じだったが、少しずつ慣れてきた。コロナ禍で新しい情報を入れるためのツールとして、生涯学習センターで実施している事業は非常に大切な時間になるのでは。

生涯学習奨励員は、それぞれが地域の中である程度リーダー的な存在になっていらっしゃる方が多い。しかし、オンラインに不慣れな方がかなり多いと思う。でもやっぱりこれからのことを考えると、これにも慣れて自分たちの地域の中に取り込んでいく、何らかの形で知らしめていかなければいけない。

これからも地域課題あるいはその現代的課題に取り組んでいただき、そういったものを情報提供してくだされば大変ありがたい。

災害であってもいろんな場面が来る、例えば会議をやっているときにどうすればいいのか、といったことを、実体験をどこかで頭の隅に植え付けることは大切だと思う。

リーダー不在でも事業ができるような底上げも必要。

(G委員長)

調査研究、講座、研修の3つがつながりによってメッセージが深まる。それぞれの活動の質が非常に高くなってきている。それが単なる足し算でなく、より大きな効果を生むのではないかな。

センターは灯台のような役割があるのではないかな。遠くにいてもセンターが光を放ってそれを市町村、あるいは市町村の方々が外を見ることによって、進むべき方向を知ることができる。

光を放ちつつ、灯台下暗しにならないように実践をしていく。そういく役割、シンボルであるべき。

対面でも発信もあるし、YouTubeもあるし、さまざまな形で発信をしていくということはやっぱりますます重要になった。

その先端のレベルには追いつけない方も市町村にはいるかもしれない。こういう場でこういった新しい活動に刺激を受けてもらいたい。そしてぜひ追いつきたい、そういったところに落としていくことが、センターのあり方ではないかな。

全国に光を放っている存在だと思うので、ぜひこれからも進めていっていただきたい。それが秋田県の生涯学習の推進というところに大きく関わっている。

(C委員)

不登校支援をしていて、保護者向けの相談を新聞などで見るが、都合が合わなくていけない、子どもの気分が合わない、という事をよく聞いた。

今TwitterやInstagramとか自分の都合のいい時に参加できるメディアが多い。多分みんなそういうのに参加してると思う。

生涯学習センターも私たちの事業も、人が入りたいとかちょっと勉強したいって思ったときに入り込めるような体制が必要なのか。

(D委員)

持続可能なまちづくりにとても興味がある。障害者の生涯学習もここにつながればい

いと思う。プレイヤー不足の話だけでなく、前回の運営委員会の時にその資料にルビが必要な人と不要な人の話っていうのはすごい印象に残っている。必要なのは対話だと思う。

オンラインの可能性はあるが、初めての方にはハードルがある。その気持ちを忘れないようにしたい。参加のコツみたいなこととか、教えていただければ、不慣れな人も楽しい、大丈夫だ、リアルとは別の楽しさがある、そのようなことを発信していただけたら、可能性も広がると思う。

6 所長あいさつ

本日は熱心にお話をしていただきまして大変ありがとうございました。おかげさまで来年度に向けて貴重な意見を伺うことができました。当センターは県の公共施設であるためにコロナウイルスへの感染防止対策というところに関しては最大限の対策が求められていて、この1年間苦慮してまいりました。けれども、人と人とのつながりが作りにくいこうした時期にありましては生涯学習の場の提供ですとか、社会教育施策の実施というのは県民から実はより求められているのだろうな、ということも強く感じております。

令和4年度がどのくらいコロナウイルスに翻弄されることになるのかは分かりませんが、当センターが秋田県の生涯学習の拠点施設としてそして灯台としてより機能できますように所員一同頑張っ参りたいと思います。

今後ともお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。本日はどうもありがとうございました。